

日本心理臨床学会第34回秋季大会

学会総合検討委員会 自殺対策専門部会企画シンポジウム

『若年自殺増加の背景にある社会的状況とは ―現象理解の糸口を探る―』

2015年9月18日（金）

司会（勝又） 皆さんおはようございます。本シンポジウムは学会総合検討委員会自殺対策専門部会企画シンポジウムです。シンポジウムに先立ち、皆さま方にこのシンポジウムの企画の趣旨、留意していただきたい事項について、話をさせていただきたいと思います。申し遅れましたが、本日司会を担当いたします新潟県立大学の勝又と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

司会（高野） 同じく司会を務めさせていただきます創価大学の高野と申します。よろしくお願いいたします。

司会（勝又） 本シンポジウムに先立ち、私から趣旨を説明させていただきたいと思います。

皆さま方に事前にお配りしている抄録集にも、このシンポジウムの企画に関して少し書かせていただきましたが、この自殺対策の専門部会のシンポジウムは、毎年、心理臨床学会で実施しているシンポジウムです。近年、自殺総合対策大綱の見直し以降、若年者の自殺対策が非常に重要な課題として国内で取り上げられていることは、皆さん方ご存じのとおりだと思います。本シンポジウムでは、ここ3年ほど、若年者の自殺の増加に関して、専門家が集まり、ディスカッションをしていく形式を採用してきました。

その中で、最近、学会員の皆さま方から、あるいは本シンポジウムは一般公開なので、一般の方からもさまざまなご意見が寄せられていますが、そこで最も多いのが、若年者の自殺が増加した社会的背景にはどういった問題があるのかという疑問です。これに真正面から答えることは非常に大変だとわれわれも考えるわけですが、少しでもその糸口を探れないかと思い、本年度のシンポジウムをそんな方向性から企画しました。

きょうご登壇いただく二人の先生方には、どんな形でご発表いただくかといろいろ考えましたが、例えば最近、若者の幸福度合いが上がっていると言われています。幸福だと答える若者が非常に多くなっている。しかしながら、自殺は増えている。このギャップをどのように考えたらいいのかということに、個人的には非常に興味を持っていました。その背景の一つとして、若年者の中ですごく幸せだと感じる人と不幸だと感じる人が二極化してしまっているのではないかという仮説が一つ、成り立つのではないかと思ったわけです。なかなかうまく社会の中で適応できずに不幸だと感じる若者たちの背景は、どんなものかを探りたいということが1点です。

それから、幸せとはそもそもどんなときに感じるのか、あるいは幸せと感じていることが本当に本人にとっての幸せなのかというところの議論も、もう1点あると思います。そ

の点に関しては、自殺をする人、あるいは自殺で亡くならない人はどんな幸せの捉え方があるのかを、もう一回考察してみる必要があるかと思いました。その観点から、シンポジストの方にお話をお願いしようかと思った次第です。きょうは、そんな前提でこのシンポジウムを企画しました。

きょうご登壇いただくお二人の先生は、お一人目が岡檀先生、お二人目が鈴木晶子先生で、お一人 40 分ずつぐらい、時間をたっぷり取り、日ごろの活動についてお話しいただこうと思います。その後、フロアとのディスカッションの時間を取り、全員で 2 時間を充実させた時間にしていきたいと考えています。

シンポジウムに先立ち、1 点だけ皆さま方にご了解いただきたいことがあります。本シンポジウムは一般公開のシンポジウムなので、録音をさせていただいています。皆さん方からのディスカッションの内容は基本的には公開しない予定ですが、シンポジストのお話については後ほど学会のホームページに公開する予定になっています。その点だけ、皆さま方にご承知おきいただきたいと思います。

前置きが長くなりましたが、シンポジウムに入りたいと思います。それでは、お二人の先生方、一度下に下がっていただき、岡先生から先にお話をいただきたいと思います。

それでは、シンポジストの紹介をさせていただきます。まずお一人目のシンポジストは岡檀先生です。和歌山県立医科大学保健看護学部の講師でいらっしゃいます。お名前をご存じの方も多いのではないかと思いますが、『生き心地の良い町』というご著書を出されて、自殺が少ない地域はいったいどんな特徴があるのかということの研究していらっしゃる先生です。私が先生を初めて拝見したのは、先生が社会精神医学会の優秀論文賞を取られたことがあり、そのときにまさにこの研究をご発表されていて、会場で聞いていてなるほどなと思った記憶があります。そのときから実際に自殺の少ない地域の特徴をずっと研究されているので、きょう、その成果をここで発表していただき、われわれのディスカッションの材料にさせていただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

岡 ありがとうございます。皆さんこんにちは。岡です。よろしくお願いいたします。きょうはこういう機会をいただき、たいへんうれしく思います。このテーマは私、個人的にもたいへん気になっているテーマではありますが、最初にお話がありましたように、なかなか難しい。どこからどう取り組んでいいのかわからない。私としても手探りの状況なので、途中ではありますが、もやもやした気持ちも含め聞いていただき、意見交換をさせていただこうと思います。

まず、私がいま行っている研究を簡単に紹介して、きょうのテーマと絡めてお話をしたいと思います。私の研究のテーマは、先ほど勝又先生がご紹介くださったように、自殺希少地域における自殺予防因子の研究です。日本に自殺が多いことは、もう皆さんご承知と思いますが、全国一律に高いわけではなく、国内に非常に大きな格差がある。ものすごく高い地域とものすごく低い地域があり、その平均値を出すと一つの値になるわけですが、国内にこれだけ格差があることがまず、私は不思議だったのです。自殺が少ない地域は、なぜ少ないのか。なぜ自殺の発生が抑えられているのかというところが気になり、調査を始めたわけです。

調査の対象としたのは日本である意味、自殺が最も少ないと言える町で、この町を探していくに当たっては、昔は日本には 3318 市区町村あったわけですが、3318 の 30 年間の自殺率を調べ、統計的に処理をして比較をした結果です。この町、すごい。本当に突出して自殺率が低いし、しかも面白いことに、両隣のぴたっとくっついている町は自殺率がかなり高いのです。にもかかわらず、徳島県の旧海部町の自殺率だけが飛び抜けて低いことも私の強い関心を引きました。徳島県の最南端に位置していて、太平洋に面している海沿いの町です。小さなきれいな港があり、大きな川が流れている。住宅は、いちばん右の端の写真がその一端ですが、住宅がたいへん密集している小さな町、ありふれた田舎町と言ってもいいと思いますが、なぜここがそんなに自殺が少ないか。

最初に一つ、ちゃんとしておかなくてはいけないと思ったのが、このことです。こんなに自殺の少ない海部町は、そもそも自殺の危険因子が少ないのではないか。危険因子とは自殺の危険を高める要素や自殺の動機ですが、そういうものがもともと、この町に少ないのだとしたら自殺率も低いだろうから。

自殺の動機で最も多いのが健康問題と病気の苦しみ、次いで多いのが経済問題、生活苦の問題。毎年、内閣府が発表しますが、毎年この二つの動機で全体の 7 割を占めているので、こういった要素が海部町には多いのか、少ないのか、周辺と比べてどうなのかを調べてみたわけですが、結果として特に変わりはありませんでした。つまり、海部町だけが自殺の危険因子から免れているわけではないことがわかったわけです。

だとしたらということで、この仮説を持ちました。海部町では、たとえ自殺の危険を高めるような、例えば経済の問題や病気の問題があったとしても、その危険を抑える自殺予防因子が存在するから、結果として自殺率が低いのではないだろうかという仮説です。海部町は、経済の問題に至っては、むしろ周辺の中ではすごく悪いほうです。失業率や所得

の問題、生活保護被保護率で言うと、あまりいい状態にはない町ですが、自殺が少ないというわけです。

そこで、4 年間かかりましたが、その町にお願いして調査に入らせていただき、少しずつ通い、何がそんなに違うのかを見ていきました。まず、自殺希少地域である海部町を主たる対象にして調査をするのですが、比較対象として同じ県の中にある自殺多発地域、自殺率が極めて高い地域、仮に A 町としますが、同じ県なのに自殺率にものすごく違いがあるのです。人口規模もほとんど同じなのに大きな差がある。これを比較対象として、つまり片方の町にあり、片方の町にないものは何だろう。あるいは、その逆でもいいのですが、何がそんなに違うのか。違いを際立たせて抽出していくために、これを比較しました。

とにかく、ひたすらインタビューです。私は人の話を聞くのが大好きなので、すごく楽しい工程でした。もう 200 人を超えてからは数えていませんが、インタビューを繰り返していきました。並行してお祭りの準備とか、保健師さんについていったりしながら、町の特徴を探り、最後はそれをさらに確認するために、前後 2 回、約 3300 人の住民を対象にアンケート調査をしました。それで、自殺の極めて少ない海部町のコミュニティにこういう自殺予防因子があることを、確信を持つようになりました。特に、この五つが象徴的だし、非常に影響を与えていると思います。この五つを今から簡単に紹介します。

まず、多様性の重視。多様性を重視するということがあります。二つ目に、人を評価するときに、きちんと本質的に、しかもいろいろな面を総合的に見て評価する。三つ目は、有能感。自己信頼感とも言ったりしますが、そういったものがちゃんと醸成されている。そして、これは自殺予防に直結している話ですが、適切な援助希求ができる。援助希求とは助けを求めるということです。そういう行動が取れる。最後に、これもこの町の大きな特徴ですが、人間関係が緊密すぎず、緩やかである。さらに少しエピソードなども交えながらお話ししていきます。

まず、多様性の重視というこの町の特徴ですが、事例の一部を紹介します。海部町には江戸時代に発生した相互扶助組織、朋輩（ほうばい）組があります。地域でいろいろなことを協力して行う組織です。こういう相互扶助組織は、海部町に限らず全国津々浦々、名前は少しずつ違ったり、形式も違ったりしますが、類似の組織はありますが、この何がユニークかという、多様性を認めている、多様性を重視しているところです。

まず、この組織には入会あるいは退会のルールが全くない。すごくオープンです。よそ者であれ、きのう引っ越してきた人であれ、誰でもすぐ入れる。こういう歴史の古い組織

には珍しいことではあったのですが、女性のメンバーも拒まない。これを平成のご時世で聞くと当たり前ではないかと思う方もおられるかと思いますが、全国津々浦々にあるこういう組織は排他的であるのが、むしろ大多数です。排他的と言うといやな響きがあるかもしれませんが、身内で結束して、外に向かって簡単には門戸を開かない。当然、そういう必然があり、歴史的にそのようになってきたのだと思いますが、排他的であるのが大多数である中で、ここまでオープンな組織も珍しい。

実は、海部町の近隣にある町でも同じような調査をしたわけですが、そこにも似たような組織がある。そこには入会のルールがあります。どういうルールかというと、3代続けてこの地域に持ち家を持つ家柄の者に限り、入会を許す。そういうルールが今もあります。それは別に、この種の相互扶助組織に関しては驚くべきことではなく、海部町のほうが例外だということの一つ、踏まえておいていただければと思います。

そして、もう一つ重要な点は、多くの相互扶助組織はほとんど半強制的に入られるし、入る、入らないの選択肢がないのが普通ですが、海部町の朋輩組はどちらでも選べる。大事な点は、入らないと言った住民に対し、地域で差別をしたり、区別をしたり、もちろん排除したりしない点が非常に注目すべき点だと思います。逆に考えれば、この組織に入らなければ排除されてしまうとわかっていれば、入る、入らないの選択肢はなかったはずで。特にひと昔前は、その地域で排除されたら生死にかかわることもあったと思えば、これはたいへんユニークなことだと思います。

もう一つ紹介したいことが、特別支援学級に関してです。特別支援学級とは、読んで字のごとく、知的な遅れがあったり、何かしらの障害を持っていたりして、ほかの子どもたちと一緒に勉強していくのに特別な支援が必要なクラスを設けようかという議論になったときに、海部町だけが反対した経緯がありました。海部町が反対した理由は、いろいろな人がいたほうがいいじゃないかという考え方です。世の中はいろいろな人でできている。いろいろな個性で出来上がっているのだから、一つのクラスの中にもいろいろな個性があったほうがいい。その子が人と少し違っているからといって、外に押し出して違う枠の中に囲ってしまうよりも、一緒にやっていったほうがいい。

これが海部町の独特なところですが、いろいろな人がいてもいいという容認にとどまらず、いたほうがいいという攻めの姿勢というか、いたほうがいいという積極的な考えを常に選び取っているところがあります。特別支援学級のことは、その是非はここで私が判断するような話ではありませんが、反対する理由として海部町がそれを言ったことを紹介さ

せていただきました。

次に、これもまた独特ですが、人物本位に人を評価する。つまり、学歴や地位だけではなく、問題解決能力や、人柄や、いろいろな評価の軸がたくさんあり、それを全部使って総合的に評価することをやっている。そのかいわいでも有名なエピソードがあります。

町の人事で教育長を選ぶときに、教育長は通常は教育界で長い間キャリアを積み、そして最後、何か要職に就いていたような人を据えるのが多くのケースです。しかし、海部町の選び方は、例えばこれからは子どもの教育は企画力という発想も重要だと言い出し、適任者は誰かということで求めていったところ、41歳の商工会議所に勤めていた、教育界には何の縁もなかった人を選んできて、据えたことがありました。サプライズ人事だと思いますが、海部町の人にとっては当たり前のことで、適材適所を詰めているうちに行き着いただけのことだという話をよくします。今でこそ民間人を中学校の校長先生に据えたりすることはあるわけですが、こういったやり方を海部町では40年ぐらい前からやられていたことも注目に値すると思います。

これは私も好きな言葉ですが、海部町では「一度めはこらえたれ」という言葉がよく聞かれます。西日本系の方だとニュアンスがピンと来るのではないかと思います。東京ではあまり聞かないかもしれません。「こらえたれ」というのは許してやれとか、見逃してやれとか、我慢してやれとかいうニュアンスです。地域住民が何か不祥事をしでかしたとか、隣人に大迷惑をかけたとかいうときに、その周囲の人がかける言葉で、「一度めはこらえたれ」。

これは、一度目は許してやるけれども、二度目からは許さないという警告ではないのだそうです。そのメッセージは、たった一度の失敗で長い人生、それであなたの評価を固めませんよというメッセージだそうです。つまり、挽回のチャンスがあるのだからということを発信している。「一度めはこらえたれ」という言葉が海部町にはすごく浸透している。人に短期的な、一次的な観察でラベルを貼ってしまわないということです。対する自殺の多いA町では逆の言葉が非常に浸透していて、一度でも何か失敗したら「孫子の代まで言われる」とよく言います。この違いがあるということです。

適切な援助希求。助けをちゃんと求められるかということに関しては、自殺予防に直結した話で、アンケートもご覧いただくとわかるように、「悩みを抱えたとき、誰かに相談したり助けを求めたりすることに抵抗がありますか」という質問ですが、赤い丸で囲ったところで、海部町のほうが抵抗がないと言っている。対するA町のほうが助けを求めること

に抵抗があることを示しているアンケートの結果です。

海部町に「病、市に出せ」ということわざがあります。病とは、もちろん病気を指していますが、それにとどまらず、人生で遭遇する大きなトラブルや家の中のもめごとをひっくるめて言うそうですが、もしそういうものを抱えてしまったら市に出せ。市というのはマーケットの市ですが、要はオープンにしろ。抱え込まずに、なるべく早く開示してしまえという教えだそうです。抱え込めば抱え込むほど重症化する。周囲が気づいたときにはもう手遅れだということになりかねない。それは病気も同じだし、借金もそうだし、いろいろな悩みごと、現代的に言えばいじめの問題もそう。周囲の人たちは迷惑をかけられることも承知で引き受ける。ただし、問題が小さいうちに、早いうちに言ってくれということをしきりに発信しているということわざです。

そういった教えが浸透していることを反映してか、海部町はその医療圏内でうつ受診率が最も高い。これは、うつになっている人が多いか少ないかという値ではなく、うつだと思ったときに病院を受診して治療している人の比率が海部町は高いことを示しています。つまり、何かおかしいと思ったときに、早めに周囲に助けを求めたり、あるいはしかるべき治療機関に行ったりしている。精神科病院の先生いわく、海部町の人をよく治療に来るし、また軽症の段階で来る人が多い。この背景にはうつに対するタブーの違いもあると思います。海部町とA町では、そこが非常に違う。海部町は、少し様子がおかしい人、ちょっとしんどそうな人を見ると、直接つけつけと言うのです。「あんた、うつになっとんちがう。はよ病院行き」と言う。言われたほうも「そうやろうか」と言って連れ立っていくことがたびたびあると保健師さんもおっしゃっています。

海部町はそうなんですってと、自殺の多いA町のほうで紹介すると、ちょっとしたどよめきが上がります。そんなこと言えない。考えたこともない。うつというのはタブーで、禁忌であり、精神科を受診するなんていうことを自分が言われてもいやだし、もちろん隣人にも言えないと言います。こういう大きな違いがあります。

ここからはきょうのテーマである若者の自殺が増加している現象と、いま私がやっている海部町の住民たちの处世観のようなものと照らしながら、少し考えていきたいと思います。絆というものをどう捉えているかということの一つお話ししたいのですが、絆は強ければ強いほどいいのかということを考えさせてくれたのが海部町です。海部町は、基本は放任主義で、コミュニティの中で何か問題が起きたときは必要十分に助けるけれども、それが終わると、またぱ一つと引いていくという、非常にドライなところがあります。絆と

いうか助けるためのネットワークのようなものときには強くなるけれども、必要なければ眠っているというか弱くなる。そういう自在なものだという感覚が町にはあります。

赤い羽根募金が集まらないというのは地域の社会福祉の関係者の中では有名な話で、海部町だけがいつも赤い羽根募金の額がものすごく少ない。理由は簡単です。ほかの町では、募金が始まると各戸を回り、全戸がそれぞれ同じような募金をチャリンと入れて次に回すことをぐるっとやり、全員が募金をするわけですが、海部町はそうではない。募金する人もいればしない人もいる。それぞれにちゃんと意見があり、自分はこういう理由で募金したい。自分はこういう理由で募金したくないということを言うものだから、当然、額はほかの町に比べ減るわけです。

統制や均質をすごく嫌うところがあり、皆がやっているからやらなくてはという考えがない町です。係の人がうっかり、A さんも B さんも募金しましたよなんて言うと、むしろちょっとかちんと来る。A さん、B さんが募金したのはいい。それはその人の自由だけれども、自分は自分の考えがあってしないのだ。そんなことが言えるのは、そういうことを言っても別に責められないからです。先ほども申し上げましたが、いろいろな人がいたほうがいいという考えが徹底しているわけですから、そういう意見はその町の中ではむしろウエルカムなわけです。ですから、全体主義などということがここでは起こり得ないと考えていいと思います。皆で、せーので何かをやらなくてはいけない、もしやらなかったら白い目で見られるという恐怖感が、この町にはないということです。

これも重要なヒントだと思いますが、常に複数のネットワーク、人間関係を持っておくのは、実際、口に出しておっしゃる方もいるし、行動を見ているとよくうかがえる。例えば、先ほど朋輩組という相互扶助組織に入らない人がいることを申し上げましたが、では入らない人はどうするか。冠婚葬祭など手伝ってもらえなくて困るのではないかと思いきや、当屋という町内会のような別の組織も用意されていて、そちらでカバーしてもらうこともできる。人間関係も、クラスの友達もいれば、ソフトボールの友達もいてという、非常にバラエティーに富んだ人間関係を維持している。つまり、関係性を硬直させない。この関係しかないと思うと、この信頼を損ねたらどうしようとか、そこにしがみついていく。そういうことを免れようとしている。絆をそのように解釈している町だと言えます。

アンケートでもそうですが、近所の人たちとどういう付き合いをしていますかと聞いたところ、海部町と A 町を比較したときに、日常的に生活面でいつも協力し合っています、つまり助け合って非常に緊密につながっていると言った人は、海部町は 16.5、A 町は 44

で、海部町はそういうことをやっている人が少ないと出ています。では、どういう付き合いをしているかというと、ブルーの丸で囲ったほうですが、立ち話あるいはあいさつ程度の付き合いをしている。コミュニケーションが切れているわけではないけれども、かなりあっさりとした付き合いを維持している。切れてないところが非常に重要だとは思いますが、しかし、あっさりしている。

私は徳島の後、京都、奈良、青森でも同じような調査を繰り返していて、必ず同じ分析結果が出る項目がこの黄色で囲んだところですが、緊密なコミュニティであればあるほど、住民が悩みをさらけ出すことに抵抗があるという関係性。むしろ逆かなと思う方もいらっしゃるかと思います。助け合っていて絆が強いところのほうが悩みも言えて助けてもらえると思う方もいらっしゃると思いますが、どの地域でも逆の結果が出てきます。このように出ると、確かにそうかなとは思いますが。非常に濃密な人間関係が膠着している中で、自分が何か大失敗したとか、人と変わったことをやってしまったときに、どこまでそれをオープンにできるかという、むしろ尻込みしたり、その後、何言われるかしらと思うのは当然の反応なので、こういうことが見えてきたということです。

そして、勝又先生も冒頭言ってくださいましたが、幸福感ということも面白いと思った調査がありました。海部町の住民がどういう幸福感を持っているか。海部町は周辺町村の中で自分は幸せだと思っている人の比率が最も少ない。不幸だと思っている人も最も少ないという結果でした。漠然とですが、自殺が極めて少ない地域は幸せな人が多いのかと何となく思っていたので、これはすごく意外な気がしました。

海部町の人々は皆どこに丸をつけているかというと、最も多かったのは、幸せでも不幸せでもないということです。私は、この結果が面白いというか意外な気がして、住民の人たちに、こういう結果が出ましたがどうですかと見せて回ったら、住民の人たちは当たり前というか当然のように受け入れている。「これがちょうどええんと違いますか」と言う。幸せでも不幸せでもないという感じがちょうどよくて好きなのだそうです。すごい不幸は誰しも避けたいけれども、では何が何でも幸せでなくてはいけないうと、幸せにならなくてはいけないうことのほうがしんどかったりするから、どっちつかずのところ辺りで、ふわふわっとするのは意外とええもんやと言われ、なるほどと思った。そういう海部町独特の幸福感のようなものがここにはあります。

それに比べてというか、一方で、最近よく言われるリア充を求める。リア充とはインターネット用語で、現実の生活が充実していることを指しますが、フェイスブックなどの

SNS が普及したことに関連して、自分がいかに充実しているかという私生活の断片を文章にしたり、動画にしたりして紹介できる、ときには自慢できるという時代が来て、若者が非常にこれに特化しているわけです。私が少し心配になったり気がかりなのは、リア充でなくてはいけないのだという思い込みに縛られてはいないか。それでかえって少し苦しんでいないかということです。

社会調査では幸福感を抱く若者が増加しているという結果が出ていますが、その幸福感の中身を私たちはよく知る必要があると思います。例えば、彼らが幸せだと思っている幸せな空間とはどういうことを指すのか。実は、ものすごく偏在したところの、その人個人使用の生活空間、カスタマイズされた空間があり、その中ではぬくぬくと幸せを感じていられるけれども、さて、そこから出たときにはどうなのかと考えたときに、幸福感を抱く若者の比率が高いことと、一方で若者の自殺率が高いことの一見矛盾して思えることを解き明かせないかと、いま思っているところです。

さて、海部町は「どうせ自分なんて」と考える人が少ない。自己信頼感を有する人が多いと言いました。自分は単なるちっぽけな存在にすぎない、しかし、周囲に何か影響を与えることのできる存在ではあると、漠然と思い込んでいるところがあります。関連するアンケートとしてこういう項目があったのですが、「自分のような者に政府を動かす力はないと思いますか」と聞いている質問ですが、そんな力は自分にはないと思っている人が、海部町が 26.3 だったのに対し A 町は 51.2 と、これもまた大きな開きがありました。そのように出るかとは思っていたのですが、こう大きく開きが出てしまうと、ちょっと驚きました。自殺の多い A 町のほうが、そんな力はないと半数以上の人が思っている。そういう無力感を抱えていることがこれである種、示されたと思えば、これは由々しきことだと思うわけです。

これは項目の上では政治や政府を対象にしていますが、含みのある項目です。政治に限らず、社会で起きるいろいろな出来事に対し、自分は何も対処できないわけではない、何かはできると思っているか、そうでないかという度合いを聞いています。自殺への傾きは、もう無理、もうだめだ、もうやれることはないという視野狭窄が起き、うつや自殺にぐーっと傾いていく経緯があると言われていたので、そのときに、いや待てよ、何かできるかもという気持ちを心の奥にひそませているかどうか大きなカギではないかと思います。

海部町のコミュニティにおける五つの自殺予防因子をここでもう一回挙げますが、何といてもこの町のユニークなところという特徴は、いかに多様性を重視するか。いろい

ろな人がいてもいいにとどまらず、いろいろな人がいたほうがいいということを、いろいろな場面で取り入れているということです。多様性とか、多様性を重視しようとか、今はダイバーシティと言いますが、ダイバーシティを取り入れようとかいうことを聞かない日はないぐらいですが、では、なぜ多様でなければいけないのかを考えられたこと、ありますか。私自身は、海部町に入るまであまりそこを詰めて考えたことがなかった。多様なほうがいいよねぐらいに思っていたのですが、あまりにもこの町が、多様性がいい、多様なコミュニティをつくっていかうとしているのには何かしら訳があるのだろう。それをやると何かいいことがあるという確信があつてではないかと思い、いろいろ探っていたわけです。

その答えかもしれないと思ったことが一つあります。私は海部町の中で調査をずいぶんしましたが、一方で、東京で、海部町出身で東京に長く暮らしている人、サラリーマンや、主婦や、学生さんに繰り返しインタビューをしていた時期があります。その人たちに、東京に出てきて暮らし始めたときにカルチャーショックはありましたかと聞いたら、「もちろん、ありましたよ。ないわけじゃないですか」と全員言います。全く別々に聞けけれども、皆、同じように答える。東京ではあまりにもいろいろな価値観も違うし、生活習慣も違うし、最初かなりへこみましたと言うわけです。

「だけど」という言葉がその後、続く。いろいろな人にいろいろな場面で別々に聞いたにもかかわらず、同じような表現でおっしゃったことがあります。それは何かというと、1回はものすごく落ち込むけれども、時間がたってくるにつれ、そういうものの考え方、そういう価値観が世の中にはあるのだな。世の中は自分と同じ考えの人ばかりではない。いろいろな考えでできているものだと思うようになり、だんだん気持ちが静まっていくと言うのです。

つまり、何が言いたいかというと、海部町は小さいころから、社会とは多様なものなのだ。いろいろな人でできているので、いろいろな考え、いろいろな価値観でできているのが社会というものなのだということをすり込ませている。そうすると、海部町のコミュニティから出ていって全然違う価値観や習慣にぶつかってがつんとなっても、そういえばそうだよなと思い出しながら、また回復していく。回復するという弾力性です。これをつけるためにここまで多様性にこだわっているのではないかと、私なりに解釈しました。

多様性を重視してもらえることは、2 番目のちゃんと人の評価ができる。ものすごく狭い軸だけで評価するのではなく、これもありだよ、あれもありだよ。きみにはこういうと

ころがあるね。きみにはこういうところはないけどこういうところがあるねと評価してもらえる。そして、一度目はこらえたれ。挽回のチャンスはあるよ。1回の失敗でラベルを貼らないよというメッセージがあるので、ちゃんとやり直しができると信じていることができる。それがあと思っています。

そして、有能感、自己信頼感です。今のようなコミュニティが土台にあるからこそ、困ったときにちょっと言うてみることも可能になる。ちゃんと弱音が吐ける子に育っていく。そして、息苦しさをいかに減らすかということをいつも考えているコミュニティですが、緊密すぎない人間関係を常に保とう、保とうとしている。

この五つをもう一度並べてみて、一つの方向を指し示していると思うのは、いかに息苦しくなく、生き心地よく暮らすか、生きていくかを試行錯誤してこの五つだという感じがします。若者の自殺に照らして考えると、何かしらの息苦しさ、生きづらさを感じ、やりきれなくなり、そこから回復する弾力性を残念ながら持ち得なかった人が自殺へと傾いていくのかもしれないと思いますが、海部町ではこの五つ、いかに人間の弾力性を高めるかということに向かっているのではないかと思います。

海部町は自殺予防のために、この五つをやってきたわけではない。自殺がここまで少ない町だなどということは、この町自身は一切知らなかった。ただ、自分たちがどうやって暮らせばいいだろう、どうやって生きていけばいいだろうと考え、考えしているうちに、ここに行き着いた。その結果として自殺が減っていったということではないかと思っています。

とにかく心の弾力性を強めるにはどうしたらいいだろうということを、若者の自殺問題の中で考えていく。そこに海部町のこういう特性が一つのヒントになるのかもしれないと思い、きょうはこういう紹介をさせていただく機会を得てうれしく思います。聞いてくださってありがとうございました。

司会（勝又） 岡先生、どうもありがとうございました。（拍手）

では、続きまして鈴木先生をお願いいたします。

司会（高野） 次にお話しいただく鈴木晶子先生をご紹介します。鈴木晶子先生は若年生活困窮者の支援をしている臨床心理士でいらっしゃいます。心理的なケアやソーシャルワーク、就労支援、地域コーディネートを主とした寄り添い型支援を行っていらっしゃいます。現在、生活困窮者を支援する一般社団法人インクルージョンネットかながわ代表理事をなさっていらっしゃいます。抄録にはインクルージョンネットよこはまとなっていま

すが、7月に名称が変更されたということで、現在はインクルージョンネットかながわとなっています。ご覧になった方もいらっしゃると思いますが、「NHK スペシャル」やNHKの「クローズアップ現代」に出演なさって、若者たちの貧困について、さまざまな話題を提供していらっしゃいます。どうぞよろしくお願いいたします。

鈴木 皆さんよろしく願いいたします。インクルージョンネットかながわの鈴木と申します。岡先生の話聞きながら、海部町の自殺の予防因子は今の若者が置かれている状況とある意味、真逆の状況だと思いました。きょうの私の話もそうした真逆に置かれている若者の現在の状況をご理解いただければという話になるかと思います。私は、もともと不登校、ひきこもり、特にひきこもりの若者、そしてニート、最近では若年無業と言いますが、そうした方々の支援をしてきました。そういった中で、いま若者について感じていることを、自殺という観点からお話しできればと思います。

自殺の危機因子は複合して次第に自殺に追い詰められていくと言われたりします。そうした中で、自殺対策では社会的要因も踏まえ、総合的に行うとされています。私どもインクルージョンネットかながわは、生活全般、縦割りでない、その方に寄り添った支援ということでずっと活動していて、現在は、今年度の4月から新しく始まった生活困窮者自立支援制度に関する事業などを受託したり、民間法人としてさまざまな就労の支援や、子どもたちの支援などをしながら活動している団体です。

まず、お話ししようと思うのが、この分野に詳しくいらっしゃる東京大学の教育社会学の本田由紀先生の、私たちの現場でもすごくピンと来るなと思っている研究を紹介したいと思います。本田先生は戦後日本型循環モデルという言い方をされていますが、何かというと、いちばん上に正社員たる（通常で言えば）父親、家族が右側、母、そして、子どもは教育という分業をしています。日本は社会保障が非常に薄いし、また教育の政策にも予算が割かれていないと言われますが、産業政策をしていけば正社員の父親が長期安定雇用で、年功賃金で、子どもの教育費がかかるのに合わせて賃金が上がっていき、それを家庭に持ち帰る。家庭のことは母親がやり、母親は教育意欲を喚起し、公的な教育支出の少なさを補います。教育ママということで言われて、このモデルがいいかどうかは別として、会場にいらっしゃる方の中には教育関係の方もいらっしゃるでしょうから、不登校という問題はこうした景気の良かったころから子どもたちの中に起こっている問題です。これがいいか悪いかと言われると、行き過ぎたときに子どもたちにとって非常に息苦しいものであったことは、支援に携わる皆さんであればずっと感じてこられたことではないかと思い

ますが、とにかくにも家庭から教育費を注ぎ込み、教育意欲をもって子どもを育てていく。そういう中で子どもたちは教育機関の中で着々とやっていき、新規学卒一括採用に乗って皆が護送船団式に就職を果たしていき、また教育のほうは、若年労働力の高い需要があったので、それを送り出していくことにより、国の政策と正社員たる父、専業主婦たる母、そして教育に取り組む子どもという循環が成り立っていたわけです。

これは、今は昔という感じになっているわけで、これが破綻したのがバブル崩壊以降ということになるかと思います。中核的正社員は非常に少なくなっていき、周辺的な正社員、非正社員、自営業という形になっていて、正社員、長期安定・年功賃金といったものはいま非常に厳しい状況になっている。また、比較的長期安定と思われる正社員であっても、必ずしも年功で賃金が上がっていくわけでもなくなっている。

そういう中で賃金や労働時間などの条件の劣悪化が起こり、そこからはじき出されてしまうと、社会保障制度がもともと薄い中でセーフティネットの切り下げが起こっている中で、何の支えもなく孤独に貧困に耐える個人が増加していく。そして、教育にますますお金をかけていかなければというふうにして、教育にお金をかけられる層とそうではない層があり、教育費、教育意欲の家庭間格差の拡大が指摘され、教育を受けたその後としては、離学後に低賃金で不安定な仕事に就かざるを得ない層が拡大している形で破綻をしているという指摘をしていらっしゃいます。本田先生は非常によく現場に足を運ばれる先生なので、そうしたところもあって、こうした研究になっているかと思います。

実際、こうした課題につながる統計はどんな感じになっているかというと、見ていただくと、正社員の定義ですが、フルタイムで期限の定めのない契約をされている方です。それ以外のものは非正規の雇用ということですが、平成 12 年で 26%だったものが平成 20 年では 35.2%、3 人に 1 人。年収 200 万円以下の給与所得者が平成 12 年で 18.4%が平成 23 年で 23.4%です。非正規雇用や年収 200 万円以下の低収入というのは、もともとは例えば学生や主婦の補助的なパート・アルバイトが中心だったわけですが、正社員のパイが少なくなっていく中で、本来自分の生活を自分で成り立たせなければならないとか、家族の生活を自分が主たる生計者としてやっていかなければならない方にまで、こうした状況が広がっている問題があるわけです。

次に、高校中退者が約 5.4 万人です。また、中高不登校が約 15 万人、ニートが約 60 万人。ニートというと失業者でもなく、仕事をしてないけれども就職活動もしてない方々ですが、だいたい 60 万人規模で推移しています。推計値なので多少のぶれはありますが、

だいたいこれぐらいですと推移しています。ひきこもりが、内閣府では 35 歳までで 74 万人というのがありますが、厚生労働省の推計値だと 26 万世帯。生活保護世帯のうち約 25%、母子世帯においては約 41%の世帯主が出身世帯でも生活保護を受給している。大卒者の貧困率は 7.7%であるのに対し、高卒者では 14.7%、高校中退者を含む中卒者が 28.2%とされています。

数年前に二極化する若者問題という書籍が出されていますが、私自身活動していて最近ますます二極化ということを感じます。一つは、過剰な教育や過保護などで息苦しい若者たちです。わが子を成功させる。あるいはわが子をニート、ひきこもりにしない。ニート、ひきこもりになったらどうしようという保護者の方からの相談がこの何年、増えてきたと思います。

厳しい社会状況の中で、あるいは成功することが非常に賞賛される社会の中で、わが子を成功させることにより、親が自分の自己実現を果たすような場合、あるいはそういう高いところではなく、自分の子が将来働けなかったらどうしようという親たちの非常に大きな不安があり、それが教育に向かわせているのではないかと感じるが多々あります。あるいは意欲や意味の喪失、自尊感情の低下、ありのままを認められない若者たちの悲鳴を私はよく感じます。結果として不登校、ひきこもり、無業などの社会からの撤退が起こっているのではないかと思います。

こうした問題は、生活困窮とは関係ないのではないかとよく言われるのですが、私たちの法人は若者だけを支援しているわけではなく、生活困窮者自立支援制度というのは、生活に困窮する方あるいはその恐れのある方なら誰でもとなっているので、いろいろな方を支援します。最近、いわゆる団塊ジュニア世代ですか、30 代後半、40 近くの方から 50 代前半ぐらいの方々が生活困窮ということでつながってくるが多くなっています。それぐらいの働き盛りと思われる方が全国的に見ても相談がいちばん多いのは先日、報道でもあったとおりです。

どういう方がいらっしゃるかというと、いろいろな方がいらっしゃるのですが、非常に困難ケースとして地域から寄せられるのは、長期ひきこもりの方です。30 年ぐらい引きこもっているといった方々が、親御さんが出ていってしまったり、認知症になられたり、あるいは亡くなられてしまったり、これまで守られてきた方々が、守り手がいなくなったために生活が成り立たない。ご本人が成り立たないということでつながってくるよりは、むしろその成り立たなさはどこに向かっていくかというと、例えばごみ屋敷とか、近隣トラ

ブルという形で表れてきて、市役所とか、議員さんとか、民生委員さんとか、警察官とかいった方々が、市民からの苦情として受けていらっしゃる。自治会などからの申し入れとか、近隣の方から訴訟に発展しているようなケースもあります。最初は二極化しているかのように見える。本来は比較的支える力がある世帯の一見個人的に見えるようなこうした問題でさえ、40代、50代になると同じ風景に行き着くのだなという感じがします。

先日、経過はわかりませんが、たぶん20～30年引きこもっていると思われる40代後半のごみ屋敷にお住まいの方の家庭訪問に行ってきました。保健所の方と一緒に訪問したのですが、何も困っていません。彼からは生きたいとか何かしたいという欲求はなかった。死にたいとはおっしゃらなかったけれども、日々をどうやって暮らしているのか、そのお金がどこから出てきているのかはわかりません。親御さんはすでに亡くなっていますが、ご本人の家庭内暴力の末に、もう10年ぐらい前にお母さまは家を出ていかれてしまい、お一人で生きてきたようです。お母さまは2～3年前に亡くなったと駐在の方から聞きました。消極的な自殺というか、ただ座って死ぬのを待っている感じがしました。

その方はたまたま生き残っているけれども、きっとこうやってこもっている間に、どこかで生きる意味や意欲をなくしてしまい、ひっそりと亡くなっていく方がいるのだろうな。その方はたまたま引きこもる家と、食べていけるだけのお金を恐らく親御さんが残してくれたけれども、亡くなっていく方もいるのだろうなという感じがしました。それともう一つ、もう50近くになる方なので、もっと早くに出会えたらなと思いました。

そうした方々がいる一方、困窮世帯など、非常に不十分な養育の中で育つ若者たちがたくさんいます。私はどちらかというとこちらをメインに普段かかわっているのですが、生活だけで精いっぱい親御さんです。だいたいこういう世帯のお子さんたちは支援機関につながってくることはないので、いろいろなところと連携しながら、なるべくつながるように、話せる場所があればどこにでも行くし、例えば高校との連携事業というので別の法人と一緒に組み、私たちが待っていても相談に来てくれないので、自分たちが行ってお話しできる糸口を設けられる場所をつくろうということで、学校の中でカフェをやっています。困窮世帯の子どもたちは全日制の中でも学力下位の学校か、定時制か通信制の辺りにだいたい集まってくるので、全日制の中でも学力的には低いところに入っています。共感した別の団体さんや自治体さんが、例えば定時制でやっているところもありますが、いま少しずつ広がってきています。

実際にお会いすると、生活だけで精いっぱい親御さんで、子どもさんが大変な状況に

あっても何ともできないし、あるいは気づかないということもあります。多い方だとトリプルワークのような状態で働いている方もいらっしゃる。たまたま親御さんにリーチできてお話しすると、自分自身もそういう中で育ち、愛情をかけられずに育ってきた貧困、ネグレクトも含めた虐待の世代間の連鎖を非常に感じます。

また、環境へのあきらめ。彼らに幸せか不幸か聞いたら何と答えるだろうなと思いながら先ほどの研究を見ていたのですが、あきらめ、こんなものですよ。自分が SOS を発したときに状況がよくなる感覚はない。面倒くさいし、いいですよ、こんなものですからという子たちが多くいたりします。あるいは、さみしさから起こる問題行動があります。子どもたちが起こすさまざまな加害や被害の事件は、さみしさから起こってくるものがたくさんあるのではないかと思います。

また、貧困の中で育った若者がまた早く子どもを産んでいき、次の貧困への連鎖が始まるのも困窮世帯の子どもたちを見ていると、よく感じることです。たぶん、さみしいのだと思うのですが、例えば高校に行っている、生徒さん同士で付き合った、別れたというようなこと、友達関係のトラブルと彼氏とけんかしたとかそうした話が非常に多いです。1 カ月ぐらいたち、このあいだの人とは別れたのだけれども、また新しい彼氏ができたのだけれどというようなことで、頼る人がない中でそういった恋愛の問題が出てくるし、私がかかわっている学校では、毎年妊娠してやめていく子たちが何人もいます。

いま生活困窮者自立支援制度は制度になり、年代を問わずということでやっているのですが、私たちは 5 年ほど前から、年越し派遣村などの流れで内閣府のモデル事業をやったときは横浜でやらせていただき、モデル事業 1 カ所で人口全部では無理なので若者でやってみようということで、若者を主たる対象にした生活困窮者支援事業を 2 年 4 カ月ほどやらせていただきました。

登録者は 742 名いて、複数回答ですが、多いのは仕事をめぐる問題で、男性、女性ともに多い。男性で 74% が仕事をめぐる問題で、女性でも 63% になっています。ただ、この中で、失業だけではないのです。だいたい 3 分の 2 ぐらいが失業していて、経済的に困窮しているので、お金を得るために次の仕事を探さなくてはいけないという方ですが、3 分の 1 ぐらいは労働の問題です。セクハラ、パワハラなどもそうですし、賃金未払いということもありました。世の中に従業員に賃金を払わない会社がこんなにたくさんあるのかと本当にびっくりしましたが、最大で 11 カ月賃金未払いというところで働いていた 20 代の方がいました。どうして辞めないのと聞いたら、ほかに仕事を得られないと思えないから。

辞めてしまい、次の転職先が見つからないよりは、今の会社で働きながらお給料をもらえるようにお願いしていくほうがいいのではないかと思います、11 カ月来たとおっしゃっていました。

次に男女共に多いのがメンタルヘルスをめぐる問題です。だいたい半分ぐらいです。生活困窮者の事業ですが、このパーソナルサポートサービスの後に 2 年間、厚生労働省が生活困窮者自立促進モデル事業をやり、全国からデータを集めたのですが、全国的に見ても、20 代、30 代の若年層はだいたい半分ぐらい、メンタルヘルスの問題を抱えている。

民間の支援になるとどうかと思ったら、東京のホームレスや生活困窮者を支援しているっしやる有名なもやいさんという NPO が出されている報告でも、やはり若年層の半分ぐらいはメンタルヘルスの問題を抱えている方です。つまり、若いうちに生活に困るのは、仕事をするのがなかなか難しい状況の中で、これは全国一律で取っていた統計で、うつ病や統合失調症といった疾患、発達障害などの方々も入ってのメンタルヘルスに関わる課題をお持ちの方が、半分ぐらいということです。

あとは、生活困窮の事業なので、生活をめぐる問題が、平均すると男性 34%、女性 26% です。生活をめぐる問題とは、衣食住に事欠くぐらい生活が成り立たないという意味です。残りの 3 分の 2 ぐらいの方は、今はまだ何とか生活できているけれども、もう少しで危ないような感じの方です。いま現に困る方がだいたい 3 割強という感じです。年代別に見ると、10 代の子どもたちがつながってきたときには、上から 4 番目の家族や地域との関係をめぐる問題がかなり大きな問題として入ってくるのも特徴です。男女差がはっきり出るところが、四角で囲ったメンタルヘルスをめぐる問題の上の、家族や地域との関係をめぐる問題になります。

事例を少し紹介したいと思います。いじめから自殺念慮を訴える男子高校生の事例です。本人の状況は、死にたい、生きててごめんなさいと訴え、先生に付き添われて来所した男子高校生です。本人の言葉で言うと、父親はこれこれこういう感じの会社でエリートなんですよねと言うのです。過剰な教育に息切れして、中学時代から不登校ぎみで、心療内科に通院していたということです。通っていた高校はかなり学力下位の高校ですが、こうしたことから出席日数が足りなくて、本来もう少し勉強ができていたらしいのですが、内申書の点数で学力下位の全日制高校に入ることになった。高校入学後、クラスの友人とアルバイト先の先輩のいじめに遭い、症状も悪化。学校に行けなくなり、死にたいと訴えている状況でした。学校でも、アルバイト先でも、家庭でも。

今の高校生ぐらいのいじめは、教室という場面だけでなく、LINE と Twitter と、家まで追いかけてくる感じで、おうちでも落ち着かないということで、どこにも居場所がない。高校生ぐらいの子たちだと、LINE と Twitter は皆やっていて、Facebook をやっている子はほとんどいませんが、だいたいこの辺でクラスのグループがあったり、自分の Twitter をクラスの子たちが皆つながって見ていて、そこでの発言やいろいろなことも含め、すごく窮屈な中でやっている。

いじめたクラスメートの状況。担任の先生が付き添ってくださったので少しお聞きしたのですが、母子家庭だけれども、お母さんが精神障害を持ち、働けない状況で、生活保護を受けながら生活している。母親が死にたいと毎日訴えるという、かなり苦しい状況の中にいじめた側の生徒さんたちもいる。私がかかわっているいくつかの高校を見ていると、非常に特徴的なのは、登場する子たちは皆、なにがしかの課題を家庭に抱えている。被害に遭う子も、いじめの加害になる子もどちらも抱えていて、加害の子たちがかなり厳しい家庭状況に置かれていることもあるのが特徴です。家に居場所がなく、仲間たちの家を泊まり歩いていたりする中で、ほかに頼るところがない子たちが集まる凝集性の高い中で、うまくやりとりができなかったり、空気が読めなかったり、理由がほとんどないときもありますが、誰かがいじめのターゲットになる状況になっています。

いじめたバイト先の先輩はどんな先輩なのと聞いたら、たぶん 20 代半ばぐらいだと思う。大学を卒業した後、就職しなかったとか、たぶんできなかったと思うのですがと、その子は言う。アルバイトとして飲食店に勤めていて、いつも不機嫌そうに周囲に当たり散らしているということで、本人は、いじめなのかな、注意なのかなと言いながら、ほかの人にはどうなのと聞いたら、あの人は皆にああいう感じだから気にしないほうがいいよと言ってくれているのですが、自分はそういうのを 1 個 1 個真に受けてしまい、すごく苦しいですと訴えられます。

お父さんに関しては状況がつかめなかったのですが、こうやって見てみると、登場するクラスメート、あるいは 20 代の就職できずに、飲食店のアルバイトは最低賃金にはりつくか少し上かぐらいですから、フルで働いても、神奈川や東京あたりだと生活保護の基準である最低生活ぐらいにしかならない。そうした中で働いている若者が、さらに弱い子をいじめる構図があります。どこに希望を見いだしていいのか、話を聞けば聞くほど非常に困難を感じます。これが何となくいま広がっていて、横にどういう世界が広がっているのかなという状況です。

もう一つの事例は、女子高校生と 30 代の精神障害のお母さんの事例です。本人との出会いですが、お母さんが無料法律相談に行った際に話を聞いた弁護士が、子どもの将来が心配だということで私どもの相談室を紹介してくれました。母子世帯で経済的には厳しい。養育費と障害年金などで生活をされている。お母さんの世話や家事で通学や勉強に支障が出ている状況で、リストカットや希死念慮がある。相談を進めていくうちに、母親の恋人が家に出入りしているのですが、性的な虐待を受けていることが発覚して、児童相談所に 17 歳と 8 カ月ぐらいでしたか、あと 4 カ月で児童相談所が使えなくなるぎりぎりのところで一時保護してもらいました。

お母さんは 30 代半ばです。聞くと、アルコール依存で暴力を振るう父親と、父親からの DV に耐える母親のもとで育ったそうです。高卒後、進学とともに実家を出るけれども、学生生活との両立が難しく、妊娠を機に、当時付き合っていた年上の男性と結婚して退学することになった。しかし、夫からの DV に遭い、離婚ということです。たまたま弁護士から来たケースだったので、離婚の際の調書を見せてもらったのですが、よく生きていたなというような激烈な DV でした。そういう中からお子さんを連れて逃げ出し、性産業に従事しながら娘を育てていたけれども、精神疾患を発症して辞めて、今のように養育費と障害年金ということで生活をするようになったという経過だそうです。

こういう子どもたちにかかわってみると、ご両親が結構若いことも多くあります。あるいは、こうやってかかわっていた子が 18、19 でもう親になってしまうこともよくあります。そういう中でお母さんやお父さんの成育歴を聞いてみると、非常に厳しい中で育ってきて、そこがまた次の世代に行くような、親も大変な状況の中でよく生きてきたよねという難しさがあります。

最後に少しでも支援の話をしようと思います。では、こういう状況にあり、若い人たちに支援が届いているのだろうかということですが、これは内閣府の若者支援者養成研修などでも言われることで、若者支援の五原則があります。発見、誘導、支援、出口、定着。若者は窓口で待っていても支援にやっこない。発見し、支援につなげていく誘導をする。誘導という言葉は、私はあまり好きではないですが、誘導していくことが大事だ。

では、現状はというと、若者支援の施策は本当に少ない。全国どこにでもあるものというとは実は就労支援で、ニート支援の若者サポートステーションは全国どこに行ってもある相談機関です。ニート約 60 万人に対し、登録者は 3 万人ぐらいで、全く少ない状況です。窓口的にも、私は横浜でサポートステーションをやっていたことがあるのですが、いつも

1 カ月待ちぐらいで、60 万人に対し、そもそも相談員の数全然足りてないので、発見、誘導の問題だけではないですが、こうしたところがあります。

私は十数年前に、たまたま大学院生時代にひきこもり青年の家庭教師としてスタートというところから若者支援に携わるようになったのですが、ずっとやってきて、まずは何でつながらないのだろうと考えると、一つは、若者は専門機関や専門職とはつながらない。仕事に困っているからハローワークとか、病気だから病院に行くという発想が若者はあまりない。むしろ、信頼できる人とつながっていく。この人は信頼できる人だろうか。

私は若者となるべく早い段階で出会いたいと思い、いま高等学校のスクールソーシャルワーカーも非常勤でやっているのですが、先生がつなげてくれないとつながらないとか、スクールカウンセラーをやっている方はよく感じになると思いますが、なかなかつながってこない。つながってこないと言って待っていることは私の地域支援ではないので、子どもたちがいるところに行こうということでカフェをやっている学校があつたりするのですが、どこの学校にでもあるところだと一つは保健室です。来てはくれないけれども、何となく気になる生徒さんを担任の先生から聞いたときに、よく保健室に来ているらしいという、養護教員の方に、何年何組の誰々さんが来たらちょっと呼んでくださいと声を掛けておきます。

呼ばれて行ってみると、スクールソーシャルワーカーは今年度から県立高校に配置になっているので、皆知らないけれども、誰とはあまり聞かれない。誰よりは、よく見ているのは、この人は私の話を聞いてくれるだろうかとか、どんな人だろうかというところです。いちおう紹介されるけれども、だいたいスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーとか言っても、何を話す人がよくわからないというのが子どもたちの感覚なので、ぼちぼち話しながら少しずつ話し、それだったらこういうことができるよねとか、このようにしてみたらどうかなというのをだんだん提案していったりします。最初は彼氏とけんかしたとか、親御さんに殴られたとか、そんな話を聞きながらやっています。

専門職が自ら若者にアプローチすることがない。アウトリーチができてない。これだけ若者たちが大変な状況にある中で、支援を届けに行く人がいない状況があります。もう一つは、若者の状況や思いにフィットする役立つ制度や仕組みがない。若者たちとつながっていくと、大人は話を聞いてくれても何もしてくれないと、よく言われます。スクールカウンセラーとも話した。場合によっては区の人とも話した。先生とも話した。でも、誰も動いてくれない。何もしてくれない。

実際困っていることがあったら具体的に解決策が欲しいわけです。心が軽くなったといっても、子どもたち、若者たちが置かれている状況は非常に厳しいですから、現実的に仕事どうしようとか、親から殴られるのだけれどもどうしようとか、そういったことがついてこないと難しいところがあり、役立つ制度や仕組み自体が非常に不十分である。雇用の受け皿や就職先、安心して働き続けられる社会も含めて、ないということです。そうしたものがあれば、こういうものがあるから行ってみようよと言って一緒に動いたりすると、すごく信頼してくれたりすることがあります。

いろいろなことをあきらめていた、生活保護世帯の、金髪のすごい感じの悪い女の子に出会ったときですが、もう自分なんかどうせというような感じです。親御さんはもういらっしやなくて、20代のお兄さん2人と3人で生活保護で暮らしている世帯の方でした。進学する費用もないし、どうせ自分なんて、学校も大して行ってなかった。起こしてくれる親も、ご飯をつくってくれる保護者もいないので、学校も遅刻しがちで、それこそ単位が取れないので、3年生の1学期ぐらいにちゃんと成績がついてない。そうすると、2学期からの就職活動を始められない。卒業見込みが得られないから就職できるかどうか怪しい。でも、先生は何とか意欲を持ってほしいということでご紹介いただいた。

それで、うまくすればここから就職につながるかもしれないということで、地域の就労体験を紹介することにして、学校の先生も、私たちも、受け入れの事業所の方も、彼女が行けるようにということで、生活保護世帯なので交通費をどうしようとか、お金のことも含めて動いた。当日初めて事業所さんに行くときに、金髪でものすごい感じの悪い子だったのに、待ち合わせの15分前に、髪の毛を黒くして、かわいらしい女子高生という感じで現れたのです。私は待ち合わせをしたのに、どこにいるかわからなかった。先ほど待ち合わせ場所に着いたというメッセージが来たけれども、あつ、髪が黒い、というような感じでした。彼女が帰りに言ったのは、皆が一生懸命動いてくれたからちゃんとしようと思った。大人は口ばかりで何もしてくれないと思っていたけれども、皆が動いてくれたというのを言っていました。

最後は情報が届いていないということです。子どもたちの世界の中に、公的な、あるいは専門職の支援をどこで受けられるかという情報自体が届いていないところがあります。どうやって情報を届けていくか。情報を持っていたとしても、そんなの要らないとか、知らない人と何を話せばいいのと言っている子たちが、実際に会い、支援が受けられるように自分でつながっていく。具体的に彼ら、彼女らに対し提供できるものがあるという、こ

の三つぐらいがそろってくると、ずいぶん支援が届けられるようになるのではないかと思います。

時間になりましたので、私からの発表は以上にしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

司会(勝又) 鈴木先生、どうもありがとうございました。

それでは、お二人の先生は前のほうの席にご着席いただきたいと思います。これから残り時間 30 分を使い、ディスカッションに入りたいと思います。

最初に私から一つずつ先生方に質問させていただき、その後、会場からご質問、ご意見を受けたと思います。

まず、岡先生にご質問したいと思います。幸福感を最初のテーマに前段でも話をしたのですが、若者の幸福感が高くなっているという話をどう読むかということを先生にもご提示いただいたと思います。興味深いことに、ひきこもりの研究などをされている斎藤環先生が、若者の幸福感が高いのは、むしろ変化や成長しないことに対し、すごい信念があることの裏返しではないかと、本の中でおっしゃっています。もう自分は変わらない。現状維持なので、それがすごく幸福だと出ているのではないかという議論をされていたと思います。

その背景には、自分がこうなりたいとか、先生の話の中で言うと自己効力感とか、例えば変えられるとか、自分が変わると社会が変わるといような感覚がないことともつながっているのではないかと思います。裏を返せば、海部町の方々が抱いている普通の欲求とか、こうしたいとか、生活をしているときにこのように生きたいというふうに、自分の中で先に対する希望などをどのように描いているのか。あるいは、それと関連してですが、自分のライフプランと言うか、どのように生きていくのかというイメージを皆さん持っていच्छやるのか。特に海部町で生まれた若い人たちは、自分の人生をどのように考えているのかということがお聞きしたい点です。

先にそのお答えをいただいた後に、また鈴木先生に振りたいと思いますが、願えますか。

岡 いま先生の話伺い、変化しなくていいのだと思い、その時点で自分の身の回りを整えて居心地のいい部屋のようなものをイメージして、その中で一生暮らしていくのだからいいのだという、まさにそれを私は危惧しています。本人が幸せならそれでいいじゃないかと言ってもいいのかもしれませんが、もし、その居心地のいい空間が崩れたり、出な

くてはいけなくなったり、外からの変化が生じたときに、対応できなくなり、つらくなることが起きないのかが心配なので、幸せだと言っているからといって周りの人が安心して過ぎるのも、あまりよくないかと思います。

海部町の若者が幸福や人生設計に関して、どういう思いを持っているか。私なりの観察ですが、まず、あまり野望や大志のようなものはない。それがないということを、自分たちも自嘲げみに言うし、周りの人たちも、ものすごく努力して上を目指せというのがないということを言います。裏返せば、何が何でも上を目指さなければいけない、何が何でも幸せにならなくてはならないと思込んでいないことは、彼らの生きづらさを減らす要因になっているかもしれませんが、そういうところはあります。

また、ライフプランのようなものをきちっと計画立てて持っているかという、そういう印象は受けませんが、シミュレーション能力のようなものは持っている気がします。ちゃんと展望ができる。こうなったらこういうことが起きるのではないか。刹那的な破壊的な行動を取ることが昨今の若者に時々見え、どうしてそこまでやってしまうのか。少し考えれば、また自分の損になって返ってくるとか、周りを苦しめるとかということが少し考えれば想像できただろうに、パッとやってしまうという心配が海部町の若者には全然見当たらない。私の観察の限りですが、そういう気はしています。

自分の行動を、ものすごく長期展望ではないけれども、ある程度のところまではシミュレーションができ、こうなると世の中はこうなるのだということは身に付いているのかなという気がしています。

司会（勝又） ありがとうございます。それに関連して、町おこしのようなので若者が盛り上がることもないですか。

岡 あまり、そういうのもないですね。もちろん、お祭りなどは大好きで、お祭りになると、仕事でよそへ行っている人たちも皆帰ってきて盛り上がったりはするのですが、それは習慣的に楽しいイベントだというだけで、まずリーダーとかカリスマが不在のコミュニティです。水平な人間関係があり、誰かが旗を振り、この町をこうするぞというようなのはむしろないところなので、インタビューも誰にしているのかわからない。普通、町おこしのようなところのインタビューなら、その旗振りの人のところに行けばいいのですが、それがまた海部町の特徴でもあります。

司会（勝又） ありがとうございます。

では、鈴木先生に質問ですが、最後のほうで若者の支援のところで、信頼できる人とつ

ながるという話がありました。私の臨床の実感だと、信頼はとても大事だと思いますが、信頼のハードルの点で、チャンネルがフィットしないと信頼を得るためのハードルがすごく高いけれども、逆にフィットしてしまうとすごく低いと言ったら変ですが、そこが危うさでもあるところではないかという感覚があります。チャンネルがどのくらいあるかという問題があり、先ほどの先生の話の中の、中年以降になってひきこもっていた事例で、ありとあらゆる欲求がないあきらめの状態、まさに変化を全部あきらめている状態ではないかと思いますが、チャンネルの少ない中でどうやってつながるのか。

その前に、つながれるチャンネルが年を追うごとに少なくなっているのか、あまり変わってないのか。私はすごく少なくなっている感じがしているのですが、その辺の実感を伺いたいのと、では実際に信頼を得るためにつながれるチャンネルがない子たちと、どうやってつながっていくのかというところのご示唆をいただけるとありがたいと思います。

鈴木 最初の、つながっていくチャンネルですが、確かに年齢を追うごとにつなかりにくくなっていると感じています。10代の子どもたちは比較的素直で、学校に行っていたり、家にいたとしても、なにがしかのことをやっていることがあり、家での生活をどうしているとか、学校の日常の友達とのことや恋人とのことも含め、話していくとつながるチャンネルはある感じがしているのでまだいいのですが、だんだん社会から離れ、問題がどんどん進んでいけば進んでいくほどチャンネルが少なくなっていき、非常につながりにくいということがあります。

うちの相談室でも、つながれるチャンネルがコスプレしかないという若者に来て、その話しかしてくれないので、コスプレをやっているうちのスタッフがいるので、アニメしか話せない人はそういう人を当てるしか、もう取りつくしがない。そういう人が一人できたところで広げていくというふうにしていかないといけないので、それすら失われてしまうと、かわりが非常に難しくなっていくところがあります。

そうなった方に、チャンネルが非常に少なくなったときにどうするかというと、こちらから頼みに行く方法をお願いすることがあります。ひきこもりの支援だと秋田県の藤里町が非常に有名かと思いますが、支援しようというよりは仕事をしましろうという話で、仕事を用意して持っていく。あなたの力をここに生かしてほしいということでやっているそうです。

私もいま一つお願いしているのは、お母さまが来所していて、相談機関に全然つながらない30代後半になってしまったひきこもりの息子さんです。数年SEをやってパソコンが

できるということなので、困窮世帯の子どもたちでパソコンに全然触ったことがない子がいるので、学習支援の中でパソコンをやるというから、では、その講師をお願いしようかということで、あなたの力を貸してくださいということ。あるいは、ひきこもりの会をやるのだけれども、あなたの体験を聞かせてくださいとか、何か役に立ちそうな仕事を用意して声を掛けに行くことをやったりもします。

司会（勝又） どうもありがとうございます。たいへん参考になりました。

（以下、フロアとの質疑応答 略）

司会（勝又） 岡先生にはぜひ海部町コホートをこのままやっていただく。

岡 ほんとですね。ただ、標準化が進んでいる気はします。海部町は非常にユニークな町ですが、数年前に合併しました。日本中で合併してしまっていますが、そうするとユニークなところに合わせる自治体はまずないです。平均値のところに合わせて行政の体制を組んでいこうとするので、海部町はもともとユニークすぎるというので目をつけられているところもあるような気がします、そういうのがどうしても目減りしていく。また、今やメディアが発達して、もちろんインターネットもあるので、地域特有のものを幸か不幸か持たない時代になってしまっている、海部町の特殊性もどんどん標準化されていく方向にあると思い、少し危機感を持っています。

司会（勝又） 今のことで申し上げますと、実は自殺が高い地域の方が出ていくことで自殺から救われる可能性も、ひょっとしたら逆もあるのかと思っていて、逆にドロップアウトしてしまい、鈴木先生の支援の対象になる方もいるだろうし、逆にうまくつながっていくことでよくなるパターンもあるのかと思います。

岡 ただ、自殺予防因子が海部町のコミュニティ限定でなかったのと一緒に、A町ならA町にある自殺の危険を高める要素は、育っていく過程でも、いろいろな考え方や問題の対処の仕方がすり込まれているので、例えばすごく我慢強くてなかなか弱音を吐けないとか、それは出ていっても簡単に変えられるものではないのだなと思わせられることは多々あります。

（以下、フロアとの質疑応答 略）

では、高野先生、お願いします。

高野 私も小学校、中学校、高校を回っているのですが、鈴木先生にお尋ねします。鈴木先生は高校に入っていられちゃいますが、高校の場合、中退も多いですね。小中学校の段階でどのような支援を入れていたり、あるいは先ほど岡先生がおっしゃったような「病、市に出せ」という感覚をどうやって育てていったらいいのか。私が岡先生の本を学校の先生などにお勧めすると、自分は学級をこのようにしていきたいのだ。子どもたちがこういう気持ちになって毎日を暮らせるような学級経営をしたいのだという感想をおっしゃる方がいるのですが、その点についてお二人から一言ずついただければと思います。

鈴木 私も若者支援をやってきて、なるべく早い段階でキャッチしたいという思いで高校に入って何年かたつのですが、やはり小中からだなということを実感しています。特に中退せざるを得ない子たちは2パターンあり、一つはやんちゃ系と言われる子たちです。中退に至る子たちの中には発達障害がある子たちがかなり多いです。今ここで注意されたことに対して反抗してしまったら、指導され、このあいだも指導されたし、もうずっと指導されているから、謹慎になってしまい、そのうち退学になってしまうなといったことを考えられない。計算する前に反応してしまったりする子たちが一つあります。そういう子たちでも、小中でしっかり支えられてきていたり、あるいは家庭の支える力があれば、高校ぐらいまでだと、それなりにきちんと学校になじめるようになっているのですが、家庭的に非常に厳しい子たちがそのまま放置されている。かつ、非常にさみしい状況です。

二つのことがあり、貧困の対策と、発達障害を持っている家庭でのケアが難しい子たちを、どうやって学校、あるいはその先の職場をやっていくかということと、引き継ぎです。1年生になったときに、クラスに3人ぐらいそういう子がいると、高校1年生にして小学校のような学級崩壊が起こる。そういうことになってしまうとまずい。

もう一つは退学、中退に至りやすいのは不登校傾向の子たちです。こういう子たちは、学級崩壊させているような子たちの教室には入れないから、学校に来なくなってしまうという。一つの教室の中でやんちゃな子たちと、内向的な子たちが共生して生活していくことは非常に難しいということがあります。

そういう子たちも、支えがあれば、聞いてくれる人がいれば何とか耐えられるという子たちも多いので、例えば中学校などでSCにかかっていたケースに関しては、なるべく高校でも受けようねとか、一言そういう申し送りがあると、いちばん難しい1年生の最初のうちからケアが行き届きやすいかと思います。

岡 一つのクラスとか、集団というものは、放っておけば均質になる傾向があると思っています。海部町に照らして考えれば、あれだけ海部町が多様性ということにこだわり、それがいい影響をもたらしているのだとすれば、それをなぞらえたとすると、いかに均質化を防ぐかということを常に心がけていないといけない。ぼんやりしているうちに、クラスであれ、LINE のグループであれ、何であれ、均質になってしまう、全体主義になってしまう危険をはらんでいると思います。よく笑い話で言うのですが、集団、グループの中にあえてすごい変人を連れてきて混ぜるぐらいの荒療治をやってもいいぐらいではないかと思ったりしています。

また、年齢がまだ小さいころに、ゲーム感覚でこんな授業をやったらいいのではないかと先生たちと話していて、まだ雑談レベルですが、それはすごく単純で、何かの現象や何かを見たときに、どれだけの解釈があり得るか。一つや二つではない。限りなくあることを、そういう反応を癖にしてもらう。たとえばですが、パッと画面に男の人と女の人が二人出てきて、さあ、みんな、これはどういう関係の人だと思うと聞く。そうすると、兄弟だと思うとか、仕事で一緒の人だと思うとか、いろいろ出てくるけれども、この人は男の人に見えているけれども、実は違うかもしれないよねとか、まだあるよね、まだあるよねと言って、10 個しか出せなかったクラスから、では 100 個まで出してみようとか、正解はないわけです。

物事は常にそうなのだ。正面からだけ見るのではなく、横からも、裏からも見て、そのようにして社会を生き抜いていってほしい。ものすごく困難なことに遭ったときにも、裏側から見れば実は解決策があるかもしれないということを将来身に付けてもらうために、そのゲームのようなものを週 1 でやるとかいうのはどうでしょうねと言っているところで

高野 ありがとうございます。

司会（勝又） どうもありがとうございました。

それでは、時間になりました。きょうは岡先生の講演からは、自殺予防の目指していくポイントを確認させてもらったのではないかと思います。ただ、非常に難しいのは、多様性を目指している均質な集団になるというパラドックスが生じてしまい、これはわれわれが本当に気をつけなくてはいけないことだと思います。たぶん、いろいろな形でのエンドポイントがある。あるいはエンドではなく、ずっと変化をし続けていくポイントがあると思うので、それを目指しながら、どうやってこれから対策を考えていくのかということと、

実際にそれをボトムアップでどういう形で、現場でつくり上げていくのかというところで、鈴木先生からも多様なご示唆をいただいたような気がしています。

若年者の自殺の問題は、これから皆さん方と一緒に考えていきたいところもまだまだたくさんありますが、きょうはひとまずこれで終わりにしたいと思います。お二人のシンポジストの方に拍手をして終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

(拍手)

司会（高野） 入り口のところでアンケートが配られたと思います。今後のこのシンポジウムのために、ぜひ一言お書きいただきたいと思います。出口で回収させていただきますので、何とぞよろしくお願いいたします。きょうはありがとうございました。